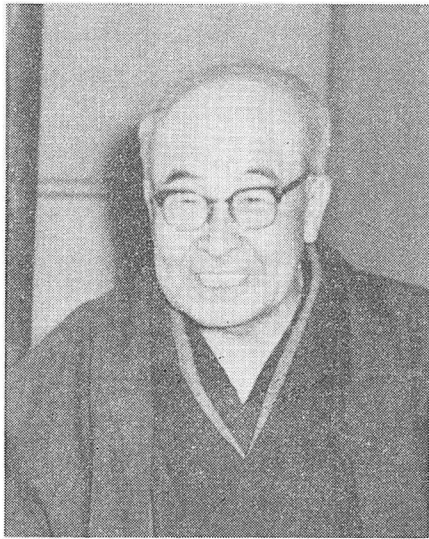


本会顧問 中村直勝博士計



本会顧問、中村直勝博士は、昭和五十一年二月二十三日午前九時、                        の自宅において心筋梗塞のため急逝された。享年八十五歳、ここに謹しんで哀悼の意を捧げるものである。

博士は明治二十三年六月七日、滋賀県大津市長等神社の神官の家に生れられた。第三高等学校を経て、京都帝国大学文学部大学に入學。大正四年七月卒業のち大学院に入學して古文書学を専攻され、翌年文科大学副手となり、同七

年九月には文科大学教務を嘱託された。翌年第三高等学校講師を嘱託され、同九年第三高等学校教授に任ぜられた。

ついで昭和二年七月文学部助教を兼任され、古文書学の講義を担当されて、昭和二十三年一月退官されるまで、長年月にわたって研究に専念されると共に、後進の指導に当られた。この間昭和十三年には神武天皇聖蹟調査委員会委員に任命され、多難な戦中・戦後の混乱期を第三高等学校での本務と京都大学での講義・研究に尽力されたのである。

博士は、幼年より神官としての薰陶を蒙られたためか、国史学専攻ながら、神祇学方面に御造詣が深く、自らも敬虔な宗教家であられた。その学殖は、史料集『春日神社文書』、『談山神社文書』等の刊行や『神社文化史』の著述にも遺憾なく発揮されている。博士の専門分野は、日本古文書学を中心に、民衆生活をも対象に含んだ社会経済史および、時代も中世を中心に古代から近世へと幅広く、『経済史観日本』や『中村直勝日本史』など通史的な概説もものされている。

博士は三浦周行博士の下で古文書学と荘園史の研究を進められ、大学御卒業後三年目に『史林』に「古文書の折紙に就て」という論文を発表されている。博士の古文書に対する情熱は、戦前すでに『日本古文書学』（日本文学社、国史講座の一）として結実していたが、自らも熱心に古文書の蒐集にあたられ、戦後博士の古稀記念にさいして『中村

直勝博士蒐集古文書(中村直勝博士古稀記念会刊)として公刊された。このコレクションは博士自ら「雙柏文庫」と称され、同書公刊の後更に三百余点の多きを加えて大和文華館に譲渡され、現在同館に総数六六五点が収蔵されている。一方で晩年の博士は御自分の古文書学を体系化すべく、大著『日本古文書学』三卷(角川書店刊)の執筆に心血を傾注され、すでに生前、未刊の下巻分も脱稿しておられたのは不幸中の幸いと申すべきことであった。

博士のもう一つの主要研究領域である莊園史は、大正十一年「後院と後院領」(『歴史と地理』10-3)を皮切りに、次々と展開されていったが、その基礎をなしていたものは、総数万を越す膨大な中世史料『東大寺文書』の整理と影写の作業である。翌大正十一年に『史林』に公表された博士の「莊民の生活——特に伊賀黒田庄に関して——」(『史林』17-2・3)は、いわゆる「悪党」の歴史の意味をはじめて追求された画期的な論文であるとともに、その後の長い「黒田庄研究史」の出発点に位置する記念碑的作品となった。こうして伊賀玉滝莊、播磨大部庄、美濃大井・茜部庄など博士の個別莊園を対象とした研究は、それぞれ各分野の先駆的業績としての地位をほしいままにすることとなったのである。これらの作品は、後に『莊園の研究』(昭和十四年、星野書店刊)として集大成され、学位論文となった。とくに博士の研究は、莊民の生活にも注意深い

目が注がれるとともに、院領の伝領関係を糾明したものが多く、終戦後の新たな莊園史研究に基礎的資料を提供したと言ふべきものであって、今日でも不朽の意義を失っていないと考えられる。

しかしながら、博士の学問的関心は古文書学と莊園のみにとどまるものではなかった。すでに大正十一年、博士は三十余歳の若さで内外書籍刊の『日本文化史(南北朝)』を執筆しておられるが、これは政治・経済・文化を総合して、統一的な時代像を捉えんとした比較的早い著作として、今なお学界から高く評価されている。博士の南北朝時代に對する関心は『南朝の研究』(昭和二年、星野書店)、『北畠親房』(同七年、同)、『吉野朝史』(同十年、同)として次々に公刊され、戦前における最も優れた南北朝史家としての地位を不動のものとされたのである。

博士は退官後一時近畿日本鉄道の嘱託となり、昭和三十一年京都女子大学教授、ついで昭和四十一年大手前女子大学学長に迎えられ、後進の指導に当られながら、なお研究意欲は旺盛で、晩年は日本古文書学会の会長に推され、文字通り学会の長老として重きをなしておられたことは記憶に新しい。また一方で歴史学の啓蒙にも意を用いられ、終生京都の地を愛された博士には、『京の魅力』など名文を駆使された一般向けの著書が多い。(今谷明記)